

戦後の住宅不足解消という使命を背負い、1955年7

月に設立された日本住宅公団。その翌年に建設

した大阪府の金岡団地を皮切りに、時代の要請に合わせた賃貸住宅の供給・管理を行ってきた。設立

からこの7月で70年。

2004年からは独立

行政法人都市再生機構

(UR)として、日本のまち

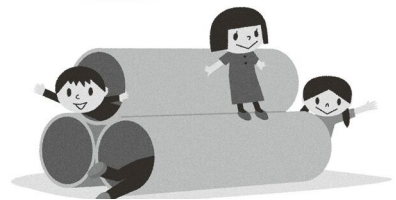
づくり・くらしづくりを支援し続けている。

7月1日。URは、UR賃貸住宅新事業メッセージ「ゆるやかに、くらしつながる。」と、その想いを言語化したステートメントを発表した。賃貸住宅事業の新たなイメージを形づくるメッセージに込める思いとは。そして、これからのURは何を目指しているのか。都内で開かれた発表会を見取材した。

○設立70年の決意を言語化

発表会において、UR理事長の石

「団地の未来プロジェクトとは、団地の新たな可能性を考えるUR賃貸住宅のフラッグシッププロジェクトです。洋光台北団地では、これまでも住棟ファサードや屋外広場、集会所などの大規模リニューアルを行い、団地と地域の活性化や若年世代



阿部民子 text by Tamiko Abe

Illustration by Shigeyuki Sakata

田優は、新事業メッセージ策定の背景を次のように語った。

「この70年で、我々の賃貸住宅の果たす役割は大きく変わりました。住宅不足が解消された一方で、少子高齢化の深刻化、在留外国人の増加などの社会変化も起きています。我々も、単に住まいをお貸しするだけでなく、そこで暮らす方の課題に対して、地域医療福祉拠点化やコミュニティづくりなどソフト面を含めた取り組みを行っています。70年の節目に当たり、我々の賃貸住宅が、社会に対して、地域に果たしていく役割は何なのか。改めて自分たちのやるべきことを言語化し、住む人やNP

の増加などにつながっています。今回はその一環として、木が茂りすぎたり汚れていた遊歩道を、道幅を広げたり、素材や色を変えて明るい散歩道へと刷新しました。土管をイメージした遊具やベンチやデッキも新たにづくり、まさにくらしとくらしをゆるやかにつなげるような散歩道ができました」と語る。

○誰もが心地よい居場所づくり

発表会の締めには、石田と佐藤氏に加え、日本社会事業大学専門職大学院教授の井上由起子氏、リクルートSUUMO編集長の池本洋一氏が登壇。「団地の未来を見据えた今後のUR賃貸住宅に期待すること」と題したトークセッションが開催された。

「URには、日本一の大家さんとして、地域で活動している人と連携して、暮らしに困っている人のサポートや人と人をつなげる活動を期待したい」（井上氏）、「20〜30代にとって、団地

〇、社会福祉団体などご協力いただく方々へのメッセージとして発信したいと考えました」

新たな事業メッセージに込めた想いについては、「つながり」には、ライフステージの変化に寄り添い、世代を超えた『縦のつながり』、そしてお住まいの方同士、地域との『横のつながり』への思い。『ゆるやかに』には、豊かな空間の中で、押しつけでなく、干渉しすぎるのでもなく、孤立するのではなく、自然に寄り添う人間関係を築いてほしいという想いを込めました。URはそうしたコミュニケーションのお手伝いしていきたいという決意表明でもあります」と解説した。

今回の事業メッセージを体现するモデルケースとして発表されたのが、横浜市磯子区の洋光台北団地に完成した「団地の散歩道」だ。監修はクリエイティブディレクターの佐藤可士和氏。佐藤氏は、今回の事業メッセージとステートメント、および2011年から行われている「団地の未来プロジェクト」の監修も手がけている。

は、緑が多い、敷地が広い、コスパが良い賢い選択肢。また70〜80代には世代の象徴であり、居心地がよいと、今まさに第3次団地ブームが訪れている」（池本氏）、「物理的なメンテナンスだけでなく、団地が社会にとってどういう意味をもっているかの『意味のメンテナンス』も非常に重要」（佐藤氏）といった提言がなされた。それに応え、石田も「今回のメッセージは我々にとっての第一歩。我々の事業の意味を見つめ直し、自分たち自身も磨きつつ、新たな価値の提案をしていきたい」と、決意を新たにした。

7月4日からは、吉岡里帆さん、千葉雄大さんによる新CMの放映も始まった。CMで描かれる、道行く人と挨拶を交わしたり、公園で遊んだり、集会所で集うなど、「いろんな暮らしが集まってできる心地よい居場所」づくりのために、URの新たな挑戦が始まった。



上／発表会でトークセッションする登壇者。
左／佐藤可士和氏が手掛けた散歩道。

街に、ルネッサンス



【企画制作】新潮社